学級文集への新提案

教材となる文集を作る

富山県砺波市立出町中学校　中嶋洋一

一　先生、英語を学ぶのは入試のためです

「先生、今年の入試にはどんな問題が出そうですか。私、英語で点数を稼がないと志望校危ないんです」

十一月も半ば、ある生徒がこう私に尋ねてきた。入試を前にした途端、英語が入試のための教科（目的）に変身する。

「先生、いつまで自己表現をやらなきゃいけないんですか。長文問題はいつからやるんですか」

「先生、教科書の訳し方をきちんと説明して下さい。歌なんか受験に役立ちません」

それに追い打ちをかけるように、ベテランの先生の声が耳の奥で鳴り響く。

「背に腹は変えられないね。きれい事を言っていたら生徒がついてこないよ」

中学校の三年間、彼らはメッセージを伝える手段として言語を学ぶ喜び、使う楽しさを味わってきたはずだ。それともそう考えているのは教師の私だけだったのか。

そんな屈折した思いが私の頭を過ぎった。英語で何かまとめて表現できるようにしてやりたい。そうだ、三年間の集大成として文集を作ろう。こだわりを持てるような作品を残そう。

こうして、私の英語卒業記念文集作りが始まった。

二　苦労するから価値がある

教師のビジョン（青写真）次第で、生徒の作品はどのようにもなる。私は個々の作品は苦労したものでなければならないと考えている。なぜなら、何度も積み上げては崩し、修正し、補足していくうちにこだわりが生まれてくるからだ。そして書き手が自分の作品をいとおしく感じられるようになると、その作品は読み手の心をとらえるようになる。

私の苦い思い出をご紹介する。英語の卒業文集作りを始めた頃、私は生徒たちのできあがった作品を「まあこんなもんかな」という温情でそのまま受け取っていった。

だが、文集ができた時に喜びあっている生徒たちの中で、ポツンと取り残されたように黙ってうつむいている生徒たちがいた。彼らはこんな反省を書いた。

「もっとまじめに書けばよかった。できればもう一度やりなおしたい」

「面倒だから書いてすぐ出した。今日文集を見て自分のが恥ずかしくなった。もっと何回も見直せばよかった」

これは教師の責任である。指導（アドバイス）をしないで作品を集めるだけではなんら生徒たちは育たない。私は彼らに申し訳ない気持ちで、素直に文集の完成を喜べなかった。

「いやがられてもいい。教師が妥協せずに、よりよいものにしてやろう。中学校三年間のまとめとして、学びの「磁界」（中

学校で学んだ断片的な知識や能力を磁石のように統合させる機会）を作ろう」

そう私は考えた。

三　いい作品は「教材」になる

こうして私は、次の年に再度文集作りに挑戦した。教師が生徒たちの作品を真摯に読みとろう、感じとろうとしてアドバイスを与えたためか、素晴らしい作品が一つ二つと生まれていった。

うれしくなった私は、それらを教科通信に載せて紹介した。驚いたことに、その時クラスの雰囲気が変わったのである。静寂の後、おもむろに自分の作品を取り出すと消しゴムで消して修正し始める生徒が出てきた。新しく書き始める生徒も出てきた。

私はその時ハッとした。いい作品に触れて彼らの心が動いたのだ。これだ。**いい作品は生徒たちにとって「教材」になるのだ。**

文集作りを教材作りにしよう。英語を学んでいる後輩たちのために生き生きとした子どもらしい教材を残してあげよう。

途端に私の意気込みが変わった。

教材にするためには、教師自身が個々の作品に書き手（生徒）と同じようなこだわりを持つことが大切だ。私は真剣に読みとろうとした。読んでわからないところは、すぐに生徒たちに「ここの言いたいことがわからない」と伝えた。初めは面倒がっていた生徒たちにも、だんだんとこだわりが生まれてきた。

こうして読み手を意識した作品が増えていった。

四　文集がたどった道

作るものにとってこだわりがないとよい作品は生まれない。こだわりを生むにはどんな要素が必要なのだろうか。試行錯誤の結果いくつかのことが見えてきた。

第一集（詩集）平成元年

B5版のハード・カバー（深緑）詩集

各自の原稿は業者が活版印刷。イラストだけは自前で。一頁に二人の作品。多くは五行～八行の詩。自然、動物、友情などが主なトピック。百七十頁で千八百円。ハード・カバー（手作業）が六百円。

●ハード・カバーの詩集（残る）にすることで、作品への強いこだわりが生まれる。

第二集（詩集）平成三年

B5版のハード・カバー（青）詩集

各自ワープロで印字。イラストを入れる。レイアウトは自由。一頁に二人分。十行以上の詩も出る。物語風の詩、失恋を扱った詩なども出た。

●各自がワープロで印字し責任を持ってレイアウトをすることが、完成度の高い作品につながる。

第三集（詩集）平成六年

A4版のハード・カバー（群青）詩集

各自ワープロで印字。イラストを入れる。レイアウトは自由。なぜその詩を作ろうと思ったかコメントを日本語で入れる。それを読んだ友人のコメントを入れる。一人一頁。一冊二千円（二百二十頁）。

●一人一頁という「自分に任される」場面を保障するとこだわりが生まれる。

これは、意欲を高めるには欠かせない要因である。作品に自分らしさ（個性）を出そうとする。大胆なレイアウトやイラストにスクリーン・トーンを使った見事な作品が生まれてくる。

それぞれが小さな作家（詩人）であり、イラストレーターであり、編集者なのだ。

●生徒たちのコメントを入れると、作品の読み取りに深まりが生まれる。

これは研究社の津山正編集長（現代英語教育）のアドバイスによって生まれた。コメントを入れることでその人がわかり、作品に親しみが持てるようになる。

第四集（おもしろブック）平成七年

A4版ハード・カバー（深紅）詩集

各自ワープロで印字。イラストを入れる。レイアウトは自由。読者へのメッセージを日本語で入れる。一人一頁。内容は英詩、二人ディベート、エッセイ、四コママンガ、ショーアンドテル、ポスターなどの中から一つ選んで取り組む。

●選択制にすると意欲的にいくつもの作品に挑戦するようになる。

選択制にしたのは、ディズニーランドの

ようなテーマパーク的なものにしたいという遊び心からである。題を「Tapestry（つづれ織り）」と名付けた。

五　こだわりを生む教師の演出

実は、こだわりを生むにはもう一つの要素が必要だ。教師の演出である。私が文集作りを通して学んだ有効な演出方法をご紹介する。

① 教科通信で、例を示すなど随時取り組み状況を知らせ、わかりやすい作品作りの観点を示すようにする。

いろんな作品を紹介することが大切だ。いい作品は模倣から始まる。また、最初の作品と修正して格段によくなった作品を同時に載せて比較させることも、観点を気付かせるにはもってこいの技だ。

② 作品を一定期間あたためてもう一度見直す時間を設定する。

書いている時は、自分の思いこみがある。「わかってくれるはず」では伝わらない。そこで、**一旦書いたものを忘れる。しばらく時間をおくと、今度は読者の立場になって読むことができる。**読んでわかりにくい部分が見えてくる。

③ 最後に鑑賞会（自分の作品をみんなの前で読み、コメントを言い合う）をし、みんなの文集の自分の作品がのったページにサインをする。

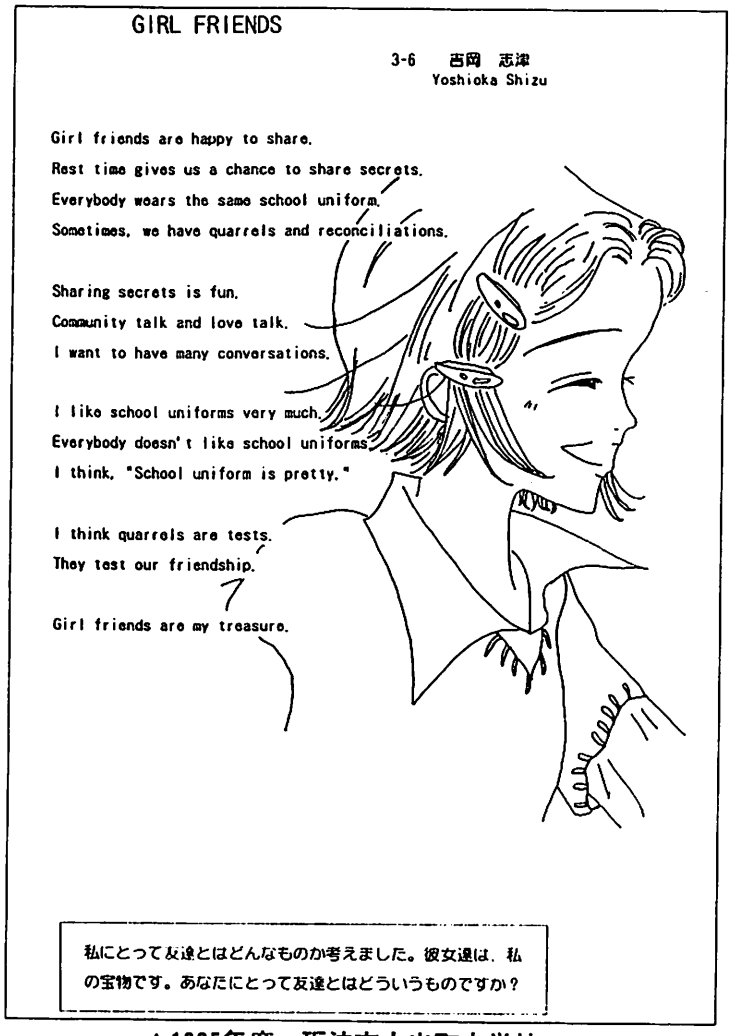
配りっぱなしでは何のために文集を作ったのかわからない。一人ひとりの考え方や個性に気づいてほしい。**今まで話もしなかった仲間がどんなことを書いているのか知ることで心がつながる。**

どれもが意欲やこだわりが生まれる要素であり、それが作品の質を高める要因にもなっていると私は考えている。

六　終わりに

今三年生は先輩の文集の作品を読んで学んでいる。共感し、感動し、ため息をつき、考え込んでいる。それを指導している担当教師は私ではない。それがうれしい。生徒が変わってもそれは受け継がれていく。教師が変わってもそれは受け継がれていく。

今年もきっといろんな素晴らしい作品が生まれてくるだろう。それがまた後輩の教材になっていく。先輩の文集がきっかけとなって後輩の文集ができる。出町中学校の卒業生たちの気持ちが英語の卒業文集を通して後輩たちに受け継がれていく。



▲1995年度　砺波市立出町中学校
卒業記念文集　「Tapestry」より

特集
英語教育博覧会
Featured Articles

わたしの文集変遷史

中嶋洋一

「文集のパビリオン」へ、ようこそ。

最初に、このパビリオンの紹介を致します。

ここでは、特別に文集づくりの舞台裏をお見せします。その関係で、作品を6点に限定させていただきました。なぜなら、それらは、私の指導観を変え、そして文集づくりの基本コンセプトに貢献した作品群だからです。

なお、この部屋では、文集づくりで学んだ私の生徒観、教育観もご覧になっていただけます。

では、ごゆっくりとお楽しみ下さい。

1. 1981年秋、すべてはそこから始まった

自己表現に取り組み始めたのは、今から17年前です。きっかけは、荒れた学校で、実験的に取り入れた自己表現活動に、子どもたちが真剣に取り組む姿を目の当たりにしたことです。

それまでは、私は黒板の前に仁王立ちになり、知識注入型の授業をしていました。そして、それに何の違和感も感じていませんでした。

ところが、自己表現活動を仕組むとなると、教師は黒板の前を離れることになります。するとどうでしょう。子どもたちの「これは何て言うの？どうして？」というつぶやきが聞こえてきたではありませんか。

それは、まったく異質の体験でした。子どもたちは、今までの教科書中心の勉強では、見せたこともないような、生き生きとした表情を見せていました。私にとっては、うれしい衝撃でした。

授業っておもしろいな、と思うようになったのもこの頃です。

そして、1981年の秋。中2で英詩を作ってみました。題はSkyとCloudの2つだったのですが、内容は十人十色でした。たった5, 6行の詩なのに、中からにじみ出てくる感性を感じ取ることができた時、私はまるで恋をしたかのように胸の高鳴りを覚えました。

授業で紹介しようと、意気込んでタイプライターで打ち込んだのですが、テスト前とあって時期を逸してしまい、とうとう陽の目を見ることはありませんでした。

しかし、その時、私の心にはいつか詩をまとめた文集を作ってみたいという、淡いあこがれの気持ちが芽生えていたのです。

2. 生きた小学校での経験

私は埼玉県で公立中学校の英語教師を6年勤めたあと、富山に小学校の教師として戻りました。

この小学校で、3年間6年生を担任して詩集を作り続けたことが、後の英語文集づくりの土台となります。

私は埼玉での拙い実践から、詩の持つ力に魅せられていたので、卒業記念詩集を作ることを、子どもたちに提案しました。国語の授業で、ときどき詩をつくるという布石は打ってあったので、難なく(?)それは決まりました。

最初は詩だけをまとめる予定でした。しかし、イラストを横に描いている子どもの作品を目にした途端、「これだ!」と思ったのです。

早速みんなを集めて言いました。

「どんなイメージなのかわかるように絵を入れてごらん」

この「イラスト入りで」という指示は、子どもたちに作品のイメージを膨らませることと、こだわりを生むきっかけを与えたように思います。絵を描いてから詩を作った子どもは、何度も詩を書き直していました。また、詩を書いてから絵を描いているうちに、足りない部分がわかって詩を書き直すという子どもが出てきました。絵だけを10種類書いたという子どもも現れました。

こうして私は、埼玉で芽生えたほのかな英語の詩集への思いを、小学校の記念詩集づくりという形でスタートさせたのです。

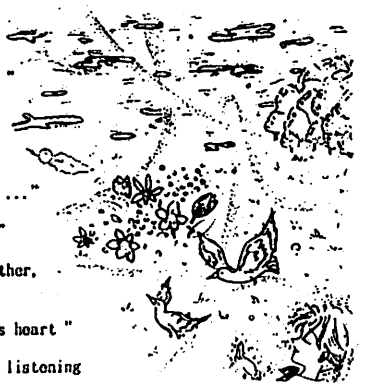
①

Wind

One day , a girl asked
" What color is the wind ? "
Wood said,
" It is green "
Sky said,
" It is blue "
Flowers said,
" It is red and yellow and ..."
A bird said,
" No, no, it is colorless "

When the girl asked her mother,
she said with a smile
" Dear, it has all colors
the wind shows everyone's heart "

That night, the girl slept listening
to the sound of the wind



②

I am a clown

I live in a show window
There are many friends there
Toy car and French doll and tin doll
I am an ugly clown
Nobody buys me

But I was not lonely
Because she is there
She is wearing a pretty red dress
I am in love with her

But one day she went out
She wasn't there
I looked and looked for her everyday
She wasn't seen anywhere
I've lost her

I became simply an ugly clown
This time, I've lost my heart

3. 夢の実現に向けて

3年間の小学校勤務の後、私は隣の中学校に英語教師としてカムバックすることになります。

いよいよ、温めてきたものを形にする時がやってきたのです。私の胸は高鳴りました。

翌年、私が3年の学年主任になったとき、初めて卒業記念詩集づくりに取りかかりました。

小学校でやったように、B5版サイズ1ページに2人分の作品を入れました。内容は身近なもの、自然を扱ったものがほとんどでした。私は、そんなことよりも、長年の思いがハード・カバーの文集という形に結晶したことを素直に喜びました。

(1) それは突然やってきた！

ところが、2年後に、ハード・カバーの文集を作った時に、今までの概念がくつがえされるような作品が生まれて来たのです。

初めにご紹介するのは、私に自己表現の無限なる可能性を示してくれた詩です。[①と②]

「先生、物語みたいな詩でもいいですか？」
T子が聞いてきました。

「おもしろそうだね。挑戦してごらん」
にっこりして、T子が席に戻って行きました。途中、M子と視線があって、互いに微笑みます。

出来上がった二人の下書きを読んで、私は思わず息を呑みました。

二人の作品は、他の作品とは違っていました。「詩という形式にとらわれることはない、これは心を表現する方法だ。自由でいいんだ」

そう語っているようでした。

私は、矢も楯もたまらずそれをみんなに見せました。すると、どうでしょう。今までSky, School, Timeなどの詩を作っていた子どもたちが、違う角度からとらえた作品を書くようになったのです。

教師が詳しい説明をしなくても、子ども同士が学び合う力を持っていたのです。

(2) 編集長のつぶやき

「どうしてこの作品ができたのか、聞いてみたいですねえ。何か本人のコメントみたいなものがあればおもしろいのですが...」

前の2冊の文集を読まれた本誌の津田正編集長が、こうつぶやかれました。電話で、その一言を聞いたとたん、私は稲妻に打たれたような衝撃を受けました。

「そうだったんだ。足りないと思っていたものが、わかった！」

それは、まさに私の文集づくりに欠けていた部分だったのです。確かに、子どもの作品だけでは、伝わりにくい部分があります。読者は、自分の経験に基づいて読んでしまいがちです。その子が、どんな時にそれを考えたのか、なぜそう思ったのかというメッセージがあると、読者もイメージを共有できます。一つひとつの作品が新鮮に感じられるようになります。

平成6年、私は今の出町中学校でバージョン・アップした文集づくりに取り掛かります。

コメントを入れるために、一人分を1ページ(A4サイズ)にしました。コメントのおかげで、まるで木で作られたピノキオに魂が入ったかのようでした。子どもたちの作品が輝き始めました。

こうして出来た文集の中で、2つの作品が私を変えました。まず編集長が絶賛された作品です。次は、文部省のALTアドバイザー(当時)のRobert Juppé氏が選ばれた作品です。[p. 16 ③と④]

③

W.C.

The W.C. is waiting for you
It is very lonely in the dark
It would like to talk to you
It wants you to go there at once
It doesn't want you to endure
Welcome to the W.C.!!

The W.C. will be happy
Welcome to the W.C.!! Let me smell you
I don't hate your smell thing
I can stand your smells
I want you to come to the W.C. at once
The W.C. is waiting for many people

The W.C. is crying
Come on!!
I am very hungry!
I want many people to come to the W.C. at once
Come .....!?
Oh..... you are big!!and.. smell very much!
You are very good!

I am very satisfied...

この詩は、公園にあるトイレが一人ぼっちで人が来るのをいつまでも待っているとてもせつない詩です。人があまりこない公園は、トイレにとってとても淋しく、悲しい場所かもしれない。もしそうだったらと考えてそのトイレの気持ちや悲しみや思いなどを詩に書いてみました。

ハレンチな詩で、とても驚きました。特におもしろかったのは、「トイレがあなたを待っている。」と言うところだけど本当に待っているのかなあ?もし待っているのなら、ぜひ話してみたい。

本当にさびしいのかなあ!もし、自分がトイレだったら、自分の一生はこの詩に書かれてある気持ちと同じ気持ちで一生過ごしているかも。

④

Morning

1 It's seven o'clock in the morning
Clock shout
'Good morning
Good morning'
My day begins
What day is today?
Happy day or sad day?
I can't imagine

2 In the morning
I am very busy
But I eat breakfast
with my family
It's very delicious
Because my mother make it
And I eat it together
I like my family

3 My father go to the office
My brother go to the elementary school
My grand father and grand mother
clean the room
I go to the junior high school
What will happen today?

私の朝は、目覚まし時計の音から始まる。朝は弱いほうなので、いつも慌ただしくて大変だけど、家族で朝食を食べるとおいしく感じられます。
気持ちいい朝が迎えられたらいいな。と思いながら作りました。

・このごろの朝は、慌ただしくてなかなか家族で食べられない。朝は一日の始まり。これからは、みんなで朝食を食べられるようにしたい。

・朝は、目覚まし時計の「おはよう」という言葉から始まる。さわやかでとてもいい朝ですね。気持ちいい朝を迎えたらhappy dayになるんじゃないかな。

お二人が選ばれたこの2つの作品は、私が予想もしなかったものでした。

実は、私は、この2つの作品には、あまり関心を示していませんでした。どちらかというと、小ぎれいにまとまった作品(イラストがきれいで、中身も感動できる)に目が向いていたからです。

編集長は、私信の中で、WC という題の意外性の中に、読者を笑わせるような機知が感じられるというコメントを寄せられました。その他にも、笑いがある作品やコメントを取り上げて、真摯にどうしてその作品やコメントがいいのかということを力説されました。私にとっては、今まで考えても見なかったことです。それは、大学の講義で学んだことよりもずっと新鮮に感じられました。

またジュッペ氏は、変に技巧に凝らずに自然体で書かれた作品であり、ほのぼのとした情景が浮かんでくるというコメントを寄せられました。

お二人とも、個性を感じとるのがうまいなあと感心しました。と同時に、きれいなものを求めようとしていた自分が恥ずかしくなりました。

私は子どもたちに、感動を要求しすぎていたのかもしれません。お二人のコメントから、自己表現の指導で、自分に足りなかった部分がはっきりしました。

(3) テーマ・パークのように

前年度の文集づくりで手応えを感じた私は、今度は遊び心からディズニーランドのようなテーマ・パークのようにしてみたいと考えるようになりました。子どもたちには、Show and Tell, 紙上ディベート、4コママンガ、エッセイなどの中から、一つ選んで取り組むように指示をしました。

この中で、2つの作品がまた私に新しい境地を開かせてくれたのです。[⑤と⑥]

最初の詩は、まったく今までになかったパターンなので驚きました。読者に直接語りかけていたからです。こういう観点は今までなかったものでした。

何か作品を残そうとする時に、自分の思いのままに表現するというやり方と、読む人(見る人)のことを考えてわかりやすい作品にするというやり方があると思います。O男のそれは、後者の立場で作られていました。

もう一つはポスター形式のものです。多くの子どもたちは、英語を書いてから、絵を描いていました。ところが、K子はポスターから描き始めま

⑤

Welcome to My Page

Welcome to my page !
I was waiting for you.
"Oh, you are very young."
"You look very good."
"I want you. "
HA, HA, HA. It's a joke.

Oh, stop !
Please don't turn the Page.

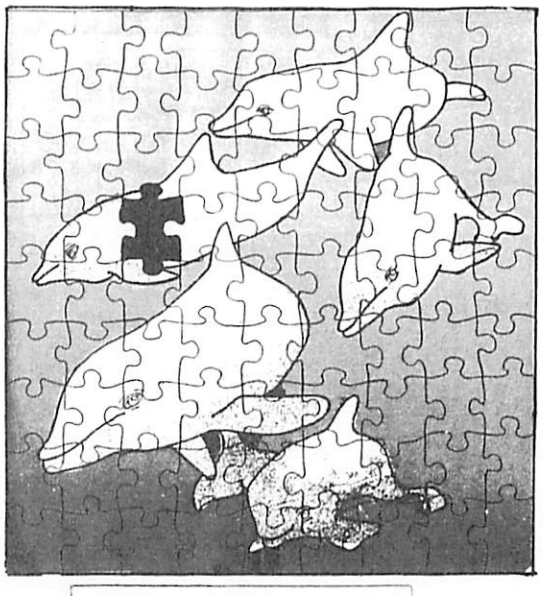
You want to be here with me, don't you?

I had a good time .
Thank you.
See you again.
Bye Bye.

私の雑談に耳をかしてくれて、本当にありがとう。
またあえたらうれしいな。

⑥

What Do You Think About This ?



What do you do ? Haven't you ever done this ?
You are missing the last piece. What do you do then ?

すべて完璧にそろっている人なんていませんよね。

した。そして、そのメッセージを英語で書いたのです。こういう Show and Tell もあるんだなと、そのとき初めて学びました。早速、ポスターもカテゴリーの中に取り入れました。絵の得意な子どもたちが、飛びついてきました。

4. 文集づくりは教材づくり

文集づくりを通して、たくさんのことを学びました。まず、自分の作品というこだわりが意欲を生みました。意欲が生まれれば、ほうっておいてもやるようになりました。

教室の中においては、いかに意欲を高めるかということを、いつも考えていなければならないことを痛感しました。それがわかってから、私の指導法も大きく転換しました。今までのように教師主導型で指導する方式から、子どもたちが発信しあってその中で気づくことができるようなシステム(ペア学習を中心とした自学)に変わっていったのです。

文集の中の作品は、子どもたちの心を豊かにします。仲間の作った作品は、共感できるという良さがあります。そして、何よりも書き方や発展のさせ方を学び合うことができるのです。

私のゴールは、この文集づくりにあります。文集づくりは教材づくりです。よい教材を下級生に残す。そのためには、力がついていなければ、いいものは作り出せません。Show and Tell などのスピーチ、ドラマ、TV 番組づくり、CM 作り、ディベートなどは、すべて「文集作り」のための力量を高める Tactics です。

また、私が、自己表現を単発のものではなく、「学びの磁界」と称して、いくつかの文法事項をできるだけ組み合わせるようにして、タスクとして与えているのは、分量のある中で発展のさせ方を学んでほしいからなのです。

このように目標がしっかりと定まっていれば、どこでどんな力をつければいいかということが、ビジョンとして教師の中に生まれてくるようになります。

いつの日か、今までの文集の中から、後輩が選んだ "Selected Version" (The Best of Anthology) を作ってみたいと考えています。そう考えただけで、わくわくしてきます。

その節はまた足をお運び下さい。

本日はご来館ありがとうございました。

(なかしま・よういち /
富山県砺波市立出町中学校教諭)